

古典に興味・関心を持たせる授業

補助教材の有効活用法

新保 友梨

一、はじめに

教育実習にいったとき、「古典は難しい」とはじめから決め付けている生徒がたくさんいるということに気づいた。生徒たちにとって古語は未知の言語であるため苦手意識をもちやすい。その上、従来の古典の授業は、現代語訳にはじまり、暗誦・文法把握・内容説明、とマンネリ化した味気ない授業が展開されがちである。

教育実習で古典教材を扱うにあたり、古典を堅苦しいと考えている生徒の先入観を払底するための授業を考え、必要性を感じ、補助教材へ目をつけた。例えば『奥のほそ道』では、視覚的・聴覚的教材、自ずと考えが深められる学習カード、等を使ったもの、そして、「平泉」に

おける芭蕉の涙と他場面での芭蕉の涙の比較による「無常観」の読み取りなどである。

生徒の中には「楽しく学べた」「わかりやすくてよかった」「久々に考えが深まった」などの肯定的な感想を持ってくれた子が多かったが、やはり「難しい」と感じている子や読み取りがずれている子もいた。

この授業実践から、補助教材を使うことで、楽しく学べたり、多様な角度から物事を考えることができたり、考えを深めながら学習することができると見えてきた。しかし、本当の意味で興味や関心をもたせるには、補助教材を使うことでどれほどの期待ができるのかを明確にすると共に、その補助教材を有効活用するための発問及び学習活動を吟味する必要があると反省した。

本論文では、従来の古典授業の位置付けや扱い方を調べることで古典授業の抱える問題点を明らかにし、生徒が興味や関心をもてるような、補助教材を有効活用する授業を考えていきたい。また、一つの教材・一時間の授業でもさまざまな補助教材やその活用が考えられるので幾通りもの授業展開を具体的に考察し、生徒の自主学習を促す、「興味・関心」をもたせるのに有効な補助教材を見出ししていきたい。

はじめに

第一章 古典指導の意義と実態

第一節 指導要領の位置付け

第一項 古典指導における「興味・関心」の定義

第二項 古典指導における「興味・関心」の種類

第二節 古典教育の歴史と現状

第一項 古典教育の変遷

第二項 古典教育の現状

第三節 古典授業の問題点

第一項 生徒の古典嫌いの実態

第二項 古典授業のマンネリ化

第二章 古典授業における補助教材の有効性

第一節 教科書教材を使った授業

第一項 教科書教材に見る古典の動き

第二項 従来の指導法と展望

第二節 補助教材を使った授業

第一項 補助教材の定義と種類

第二項 表現の理解を中心に

第三項 内容理解を中心に

第三節 これからの古典指導

第一項 音読を助ける練習工夫

第二項 読みを助ける手作りテキスト

第三項 理解を助ける比較考察・発展学

習

第三章 補助教材を最大限に生かす指導法

第一節 教材研究の実際（奥の細道）

第一項 原文研究

第二項 作品研究

第三項 補助教材研究

第二節 補助教材を使った授業の実際（奥の細道）

第一項 導入段階—動機付けと読み

第二項 展開段階—比較考察・視聴覚教材

第三項 終末段階—発展学習・読書への導き

第三節 補助教材集

第一項 地図・写真などの視覚的教材

第二項 第二項 教材に関連した読み物

おわりに

参考文献一覧

以下、卒業論文の内容を要約して載せる。

二、本文

二、第一章 古典指導の意義と実態

「中学校学習指導要領 解説―国語編―」（文部省編 平成十年十二月東京書籍株式会社刊）での古典の扱いは

「C読むこと」の配慮事項

「古典の指導については、古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い、古典に親しむ態度を育てるとともに、我が国の文化や伝統について関心を深めるようにすること。その教材としては、古典に関心をもたせるように書いた文章、易しい文語文や格言・故事成語、親しみやすい古典の文章などを生徒の発達段階に即して適宜用いるようにすること。（以下略）」（傍線は論者による）

となつてゐる。ここでいう「親しみ」「関心」という言葉を、古典授業の現場ではどのように定義し、どう扱うべきかを明らかにするため九種類の辞書でその単語をしらべた。その結果、関心と興味とは、興味の方が感情の要素が強く、また、関心は広く永続的であるという差異が生じることがわかるが、「興味・関心とは、積極的・選

択的心構え（情緒的感情を伴う）を指した心的態度及び心的機能のことである。積極的とは、行動傾向（行動誘発性）を意味し、選択的とは、反応傾向・動機づけを意味する」と、定義する。

生徒が古典に興味や関心をもつためには、古典の学習を通して「意味がわかるようになった」「日本語にはこんな美しい言葉があったんだ」などの感動を得られることも理想だと考えられる。しかしそれだけが興味・関心につながるものとは断定できない。生徒の感動がなくても教え込まなければいけないのが現状である。そうしていくうちに生徒自身が価値に気づき、さらに読み深めようとすることも考えられる。古典を学ぶことは、未知の言語を学ぶという点でまず読解に困難であり、その作品の背景なども歴史と照らし合わせなければ理解し難い場合があるので、生徒にとってはとても厄介なものである。一つの作品を読み解くために、悩んだり、試行錯誤をしたりしながらその苦勞をどうのりこえさせるか、教師は生徒とともに考えていくべきであろう。それが生徒の「興味・関心」につながるっていくのだ。本当の興味は、こどもたちが自分で見つけていくものであるから、教師はその手助けとなるような授業を展開させることが必要である。

●生徒の古典嫌いの実態

熊本大学教育学部附属中学校宮本陸士が2年生百八十八名を対象にアンケートをおこなった(月刊国語教育)一九八四年 四月 東京法令出版株式会社刊)。結果から考察すると、読みや言葉に対する抵抗から古典嫌いにつながるものがみとれるが、生徒がよみやすく、現代語訳しやすい資料が必要なこととわかる。しかし、古典の魅力は意味がとれることやスラスラ読めることとだけにあるわけではない。そういうことを生徒が感じとり、興味をしめすような授業を構築したい。

また、昭和60年に規工川佑輔が古典に関する関心の実態を調査した結果が『魅力ある古典の指導入門』(一九九一年 明治図書出版株式会社刊)に載せられている。熊本大学教育学部附属中学校と熊本県玉名群岱明中学校の二年生を対象にしたものだ。以上の結果から考察すると、古典への関心は二校とも普通というのが一番多い。A校(前者)には優秀な生徒が多いとのことであるが、まったく関心がない生徒が8・3%も占めており、とても関心を示している生徒が一〇%を越えている。これに対し、B校(後者)には関心や意欲をもっている生徒がほとんどいない。学力不足のために古典への興味をもてないのだと、この結果から筆者はいう。そして、関心が

ない理由は言葉の抵抗が第一にある。「おもしろくない」というのは内容が時代ばなれしている、現実ばなれしている、という答えがかなりいたようである。

続いて平成16年(2004年)に杉村修一がおこなったアンケート調査(「信州大学 教育学部紀要」 第二号 2004年8月 信州大学教育学部)をみていく。この調査は長野県内の中高教師を対象に行われたものだが、そのうちの中学校の部分だけを参考にさせてもらうことにする(三十七の中学校、八十四人の国語科教師からの回答)。この結果から、古典学習を苦手としている生徒が半数以上いることがわかる。また、講義形式がまだまだ続いていることにも注目したい。教科書だけでなく、補助教材もとりにいれている教師が半数以上だが、その効果があらわれない可能性があることがこれらの調査結果からわかる。

●古典授業の現状

「月刊国語教育」(一九九三年 八月 東京法令出版)で小山清は「戦後もすでに五十年を経過しようというのに、いまだに戦前の訓古注釈を中心とした授業が横行しているのは、あきれるばかりである。教科書の原文をノートに書き写させ、その傍に現代語訳を書き綴らせてい

く、無味乾燥な授業が展開されているのにも驚くほかない」と述べているようにこういった授業が今も行われている。これでは生徒たちが興味や関心を持って授業に望むことは困難であろう。では逆にそういったマンネリ化を脱した生き生きとした授業とはどういったものだろうか。「月刊国語教育」(一九九二年 七月 東京法令出版株式会社刊)(p.三十五)で安西勉夫は「古典の学習指導」に関する実践報告を調べ、それらの実践に共通するものを整理すると、生き生きとした古典の学習指導は次のような条件の上に築かれている場合が多いと述べている。

条件一 授業の展開の過程の中で、それぞれの学習活動ごとに、生徒は目標をはっきりと持っていて、今に生きる自身の課題として古典を学んでいること。生徒の主體的な活動が一貫して保障されていること。

条件二 生徒の興味や関心、学習の態度に応じて教材以外に、さまざまな資料や学習プリントが用意されていること。それらの中には、古典を素材とした随筆や小説、地図、系図、視聴覚教材、郷土資料、マンガなどの他に、学習の展開に沿ったプリント類なども含まれ

ていて、必要に応じて用意されていること。調べる活動、発表する活動、読む活動、書く活動、音読や暗誦する活動などが組み合わされていること。とくに書く活動を軸として学習を組織し、書くことによって生徒自身の認識を確かなものとするとともに、生徒が自らの発想を押し出そうとする創造的な学習が展開されていること。

条件四 個別活動、共同学習(グループ学習、一斉学習)が組み合わせられていること。個から入り、個に戻る学習の流れであること。意味や内容だけを求めるのではなく、ことばのリズム、ことばのひびき、ことばの躍動そのものを体感させ理解させるために、テキストの工夫、視写、黙読・音読・暗誦・範読などの活動を多く取り入れていること。一人一人の子どもと結び付き読みは多様な表れ方をするものであり、型にはめない配慮がなされていること。

条件五 これらが、すぐれた実践報告から学んだことだと。確かにこの条件を満たす授業というのはマンネリ化とは

言われないであろう。教師の十分な準備や、創意工夫、そして技術などが前提であることはいうまでもない。中でも、条件二にあたるもの（補助教材）が、脱マンネリと生徒のやる気に大きく影響するものであると考える。もちろん教材がすぐれているからといってそれだけでは古典に興味関心をもたせるためには不十分である。他の四つの条件も含むような、補助教材の活用法を考えなければならぬ。

二、二、第二章 古典授業における補助教材の有効性

従来の指導法として註解中心の解釈的方法と素読中心の訓練的方法があつた。中学校の古典指導も、註や文法を細かく指導するよりも、おおまかな内容を理解させる、良さに気付かせる、というところに重点がおかれている。素読は「過去の方法として顧みられなくなった」とある（『国語教育基本論文集成十七』一九九三 明治図書出版株式会社「国語科古典指導の基本的な考え方」飛田多喜雄）が、今また、素読の精神を生かして、読みながら感じさせ理解させる音読中心の指導法として活用していくべきであろう。音読・朗読を繰り返すことで、音の響きやリズムそのものを楽しみながら古典の世界に浸らせる

ことができるのだ。

●補助教材とは

補助教材とは「教科書に対する補助の役割をはたす教材」であり、その内容は副読本、学習帳、ドリル、映画、視聴覚機器、と多様にわたることがわかるが、「学習指導の上で有益かつ適切なもの」でなくてはならない。

また『新教育用語辞典』に「たとえば、従来の教室では教科書と黒板、チョークがおもな教師の武器であつたものが、現在では視聴覚教材をはじめとするさまざまな現代的教材が導入され、これらを有機的、総合的に利用して学習効率の向上をはかっている。この場合、教育内容に即した最適教材が主教材といえる。したがって教科書が主教材であり、その他の教材を補助教材とする考え方は、法的な意味とは別に変わりつつある」と書かれている。

『中学国語科 Question Box』（昭和六十年 東京法令出版株式会社刊）に、主教材でねらう内容的目標の深化拡充という点からの補助教材の発掘例があげられている（執筆者 鈴木二千六）ので参考にしたい。（上を主教材とした場合、下が補助教材となる）

■説話の場合

○馬盗人——保昌と袴垂・阿蘇の史

○実因僧都の強力——木寺の基僧

○児のかいもちするに——田舎の児の桜散るをみて
泣くこと

■随筆の場合

○春はあけぼの(『枕草子』——折節の移りかはるこ

そ(『徒然草』・『新古今和歌集』(巻一—三六)

○にくきもの(『枕草子』——久しくへだたりて逢ひ
たる人の(『徒然草』)

○雪のいと高う降りたるを(『徒然草』——八つにな
りし年(『徒然草』・『源氏物語』(朝顔卷)

■詩歌の場合

○大津皇子——大伯皇女・『懷風藻』・『日本書紀』(卷
第三〇・持統称制前期)

○額田王——大海人皇子

■その他

○平泉(『奥の細道』——春望(杜甫)・『義経記』

○雪のいと高う降りたるを(『枕草子』——高炉峰下
新ト山居草堂初成偶題東壁(白楽天)

○白川の関(『奥の細道』——平清盛・能因法師・源

頼政の作品

また、古代性(背景把握や時代的隔たり)を解決する
内容理解の一助としての例は次の通りである。(同上書)

ア 『平家物語』——地図、服飾関係の絵図、スライ

ド、平曲の録音テープ、ビデオなど

イ 『枕草子』——地図(内裏の図)、スライドなど

ウ 『万葉集』——地図、スライド、ビデオ(大和地

方万葉古地)など

エ 『奥の細道』——地図、蕪村の絵、スライドなど

●これからの古典指導

「古典というものは時代とともに新しい面を表すこ
とによつて、それぞれの時代にふれた新しい意義、新し
い問題を提示するものであり、その意味で時代とともに
成長してきたものである。そう私は解釈いたします。も
ちろんそれぞれの古典がその作られたそれぞれの時代の
制約をもっております。どこかに時代のからをくつつ
けているのであります。しかし、それが古典であるかぎ
り、単にそれだけのものではないのでありまして、それ
が今日まで生きつづけてきたということは、何百年何千
年という長い年月の間、それぞれの時代に、それぞれの
要求に応じて、新しい感じ方、新しい解釈を許してきた

ということでありませう。それでなければ、今日まで生きのびてくることはできなかつたでありませう。その意味で、古典は常に自然のように新しい、古典は第二の自然であるということができるのであります。谷川徹三「これは大村はまが、古典学習の導入時（入門時）に掲示したもの（『大村はま国語教室』）大村はま著一九八三年筑摩書房刊）である。これを学生に示すことによつて、古典をこれから学ぶことへの期待や意欲をもたせることに成功したようだ。同上書で大村はまは「学校方言といいたいような型にはまった質問の形、指示の形から抜け出して、なに？と目を見はるような新鮮さで、学習活動を進めなければ、やつて価値ある問題に取り組ませることができないことを、日々、一時間ごとに痛感していた」と述べている。これからの古典授業も、古典に対する新しい感じ方、新しい解釈、そして教師の一工夫を加えた新鮮ものでなくては生徒をひきつけることはできないだろう。

●音読を助ける練習工夫

朗読の効果には次の五つがあると主に考えられる（『音読・朗読・黙読』一九八二年 石田佐久馬編 東京書籍株式会社刊）が古典の音読にもあてはまると思うのでこ

こに抜粹する。

(一) 言語感覚がみがかれる……声に出して、自分の読みを自分の耳で確かめながら読むという場では、ひとつひとつのことばの選び方、言い回しの巧みさ、的確な語の布置などについての感覚が知らず知らずのうちに身に付いてくる。

(二) 鑑賞の深化に培う……朗々と声にだして読むことが、快感をともなう鑑賞行為の一つであると同時に、それはまたより深い鑑賞への積極的、前進的な営みでもある。

(三) 正しい読み方が身に付く……朗読の練習の過程で、発音も、発声も、抑揚も、強弱も、そして心情表現の屈折までもが吟味されてくるはずである。

(四) 作品への親しみがわく……朗読は、内容の理解を通過した、表現形式の味わいまでを含むトータルな読みであるから、朗読することによつて、その文章なり、表現なり、作品なりが好きになつてくることは当然なのである。

(五) 朗唱・暗唱へのかけ橋となる……より望ましい朗読をめざして練習しているうちに、自然にその文章が身に付いてしまつて暗唱できるまでになる。ここに至れば朗読の頂点であり、極致である。

心・意欲・態度)

② 叙述や俳句から、そこに表現されている芭蕉の思いを読み取ることが出来る。(読むこと)

③ 古文特有の言葉の意味や、読み方を正しく理解し、音読することができる(言語に関する知識・理解・技能)

④ 表現を味わい、調子を感じながら朗読・暗誦ができるようになる

● 手作りテキストの、現代語訳等がついたものを使い、大意をつかむ。わからないこと、感想、明らかにしたことなどを書き出す。発表し、目標を設定。

△予想される生徒の反応▽

- ・ 読みかたがむずかしい。漢字がむずかしい。
- ・ 内容が難しくてわからない。言葉づかいが難しい。
- ・ なぜ芭蕉は東北方面の旅に出たのか。一人で行ったのだろうか。

・ 旅の途中にはどんなことがあったのか。

・ 旅をすることにどんな意味や目的があったのか。

● 旅への思いをこめて朗読。音読の工夫をテキストに記入。(卒論本文、第二章第三節音読を助ける練習工夫参照) A 形式的なもの、B 技能的なもの、C 内容的な

もの、にわけて各自工夫を考え、群読に発展させる。

● 「義経記」を読む。内容をとらえることが目的なので、訳文を示す方がよいと思われる。最後の場面3つ「衣河合戦の事」「判官御自害の事」「兼房が最期の事」を補助資料として与える。これらの出来事が起こった場所が、今芭蕉が立っている平泉であることを理解させ、「泪を落とし侍りぬ」や句に詠まれている思いをよみとる。

教材研究などを通してこれらの活動が考えられ、卒論本文の最後には補助教材集として、多くの書物や図なども掲載した。その、古典に関連した書物を生徒に示し、読書指導へと発展させたい。生徒にふさわしい参考書・読み物をまずは教師が提示して与えてあげることから始め、それによって、生徒が自ら古典の魅力を見出し、古典のとりこになっていくことを期待する。

三、おわりに

現在、パソコンが発達し、行きたいところに行っても行けて、欲しいものは何でも買える、そんな世の中である。生徒の中には、なぜこんな時代に古典なんて古臭いものを学ばなければいけないのだろうと考える子もいる

であろう。

しかし、今の世界も昔の世界も同じように人間は生き、同じ思いで生活していたのだ。月を眺めては美しいと思ひ、愛しい人と添ひ遂げたいと思う、いつの時代にもかわらない思いがある。だから古典はいき続けているのだらう。物が溢れている飽食の時代。だからこそ失われた心。そんな思いも古典の中には流れているということに気づかせたい。

生徒に、古典に対する興味・関心を持たせる授業とはどうあるべきか考えていこうと思ひこの研究を始めたが、身をもつて古典に興味を持つとはどういうことか感じる研究であつた。あまり好きではなかつた『平家物語』や『奥の細道』『平泉』を、必要にかられて読み込んでいくうちにその深さに魅了されたのだ。これからまだ、読み続けたいと思つている。生徒にも同じような感覚に陥るよう導くことが理想なのだ。

今私は小学校の教諭として授業をもつており、古典には直接関わっていない。しかし、どんな授業を考えていけば児童が興味関心をもつてくれるか、という根本的なことはかわらないだらう。この部分が一番重要であり、一番難しいことであると感じている。更に多くの補助教材を調べ、その組み合わせ方や子どもとの出会わせ方、

などを考えていき、その中から今日の子どもの実態にあつた有効な教材を見出ししていくためにこれからも研究を続けたいと思う。

【参考文献】

文部省編(一九九八)『中学校学習指導要領 解説―国語編―』

東京書籍

(一九八四)『月刊国語教育』 東京法令出版

(一九九一)『魅力ある古典の指導入門』 明治図書出版

(二〇〇四)『信州大学 教育学部紀要』第23号、信州大学

教育学部

(一九九三)『月刊国語教育』東京法令出版

(一九九二)『月刊国語教育』東京法令出版

(一九九三)『国語教育基本論文集成十七』明治図書出版

(一九八五)『中学国語科 Question Box』東京法令出版

大村はま(一九八三)『大村はま国語教室3』筑摩書房刊

石田佐久馬編(一九八二)『音読・朗読・黙読』東京書籍

(一九八八)『国語教育』明治図書

(しんぼ ゆり 千曲市立更級小学校教諭)